

加藤拓川翁 略年譜

法学部准教授 今村 暢好

年齢	年次	加藤恒忠(拓川)経歴・出来事等
0	1859年	旧暦1月22日 松山市湊町4丁目にて、父・大原有恒(観山)、母・(旧姓・歌原)しげの三男に生まれる。幼名は忠三郎。
7	1867年	9月17日 長姉・八重の長男として正岡常規(子規)が松山にて出生。
11	1870年	藩校・明教館に入校。(秋山好古も入校。) 長姉・八重に正岡リツが松山にて出生。
16	1875年	4月 父・観山死去(57歳)。 9月 上京する。 10月 岡鹿門(千仞)の漢学塾・綏猷堂へ入門。のちに塾頭になる。
17	1876年	9月 司法省法学校に入学。(同期に原敬、陸羯南、国分青厓、福本日南。)
20	1879年	1月 父方の伯父加藤家の養子となり、再興する。 3月 司法省法学校を放校処分となる(=「賄征伐事件」により原敬、羯南、青厓、日南らとともに退学)。
22	1881年	中江篤介(兆民)の仏学塾に入塾(1879年入塾の可能性も)。
23	1882年	久松定謨(伊予松山藩主の久松家当主)にフランス語を教授。
24	1883年	6月 甥・子規が上京し、共立学校に入学。 11月 久松定謨とともにフランス留学に出発。
25	1884年	インド洋、スエズ、マルセイユを経てフランス・パリに到着。 パリにおいて法科単科大学と私立政治学校に入学。 (甥・子規が大学予備門に入学。)
26	1885年	(原敬が駐フランス公使館書記官としてパリに着任。)
27	1886年	原敬の斡旋により外務省交際官試補(奏任官五等)に任ぜられ、駐フランス公使館勤務となる。
28	1887年	1月 ベルギーへ出張。 11月より公使・田中不二麿(後の司法卿)に随行しスペイン、ポルトガルに出張。
29	1888年	4月 ベルギー・ブリュッセルにて駐ベルギー兼任公使の西園寺公望と事務引継を行う。以後、西園寺と親交を深める。 7月 ベルギー王国皇帝陛下よりレオポール勲章シュワリエーが贈与される。
30	1889年	5月 ロンドン出張、7月 ベルリン出張、11月 ブリュッセル出張。
31	1890年	1月 西園寺とモンテカルローにて交遊する。 (9月 甥・子規が帝国大学文科大学哲学科に入学(のちに国文科に転科)。) 11月 エミール・ゾラの作品に傾倒する。 12月 帰朝命令(11月発令)を受けパリから帰国に向け出発。
32	1891年	2月 帰国。

		3月 公使館書記官(奏任官四等)に任ぜられる。 8月 外務省参事官(政務局勤務)に任ぜられる。 10月 外務大臣秘書官に任ぜられる。 12月 正七位に叙任される。 陸羯南に正岡子規を紹介する。
33	1892年	3月 公使館書記官フランス在勤を任ぜられる。 6月 フランスに向け出国。 7月 フランス・パリに到着し、野村靖・フランス公使に着任報告。 8月より、ポルトガル総領事引揚げに関連しパリ・リスボン間を複数回往復。 11月 従六位に叙任される。 11月8日 フランス共和国政府よりレヂヨンドノール第五等勲章が贈与される。
34	1893年	2月13日 スペイン王国摂政皇后よりイザベル・ラ・カトリク勲章シュワリエーが授与される。 3月 野村公使が帰任したためにフランス公使館の代理公使となる。 8月 新田長次郎がヨーロッパ視察中にフランス公使館を訪れ面会する。 9月 曾禰荒助公使(のちの司法、大蔵、外務大臣)がフランス公使館に着任。 11月 公使館二等書記官(高等官五等)に任ぜられる。 (甥・子規が帝国大学を中途退学。)
35	1894年	12月 第1回日仏条約改正会議に出席。
36	1895年	5月 ロンドンへ出張。 11月 パリでブラジル条約(日伯修好通商航海条約)調印に参加。国交を樹立。 (甥・子規が中国へ従軍記者として航るも1ヶ月程度で帰国。)
37	1896年	8月 日仏改正条約調印に参加。 10月 公使館一等書記官(高等官四等)に任ぜられる。 10月 パリ万国博覧会臨時博覧会事務局の臨時博覧会事務官を仰せ付かる。 12月 正六位に叙任される。 (好古が陸軍乗馬学校長に就任。)
38	1897年	3月 パリを発ち、4月横浜に帰国。 4月 外務書記官兼外務大臣秘書官に任ぜられ、大臣官房秘書課長兼大臣官房記録課長および官報報告主任を命ぜられる。 7月 統計主任を命ぜられる。 8月 樫村清徳(医師・元東大教授)の長女・ヒサと結婚。 10月 兼大臣官房庶務課長に任ぜられる。
39	1898年	4月 勲五等旭日雙光章が授賜される(条約改正の功)。 10月 長男・十九郎が出生。 11月 高等官三等・従五位に叙任される。
40	1899年	4月 文官懲戒令に基づく文官普通懲戒委員を命じられる。
41	1900年	5月 外務省総務局人事課長を命じられる。

		6月 次男・六十郎が出生。
		10月 弁理公使(兼人事課長)・高等官二等に任ぜられる。
		12月 正五位に叙任される。 (好古が北清事変のため中国へ向かう。)
42	1901年	2月 臨時勲功調査委員を命じられる。
		6月 勲四等瑞寶章が授賜される。
43	1902年	2月 特命全権公使に任ぜられベルギー駐劄を仰せ付かる。
		3月 右膝下の整脈炎により赤十字病院に4月まで入院。
		5月 ベルギーに向け横浜を出発し、7月ベルギー・ブリュッセルに到着し着任。
		5月 三男・忠三郎が出生(のちに正岡家を継ぐ)。
		10月 妻・ヒサが十九郎を連れてベルギー到着。
		12月 旭日小綬章および金千圓が授賜される(北清事変の功)。
		9月 甥・子規が死去(35歳)
44	1903年	4月 母・しげ死去(77歳)。 (原敬が大阪新報の社長となる。)
45	1904年	2月 ベルギー政府に対露宣戦布告を伝え、中立堅持を要請する。
		6月 長女・あやがブリュッセルにて出生。
		6月 勲三等瑞寶章が授賜される。
		8月 片山潜が第二インターナショナルの第五回アムステルダム大会に出席した帰りに、駐ベルギー公使館に拓川を訪問。
		10月 スペイン王国皇帝陛下よりイザベル・ラ・カトリック勲章グラン・クロワーを、フランス共和国政府よりレジェンドノール勲章コマンドールが贈与される。 (好古が日露戦争へと出発し、騎兵第1旅団長としてロシア軍と戦う。)
47	1906年	1月 従四位に叙任される。
		4月 勲二等瑞寶章及び金八百圓が授賜される(日露戦役)。
		4月 スペイン国皇帝陛下結婚式に特派使節として夫妻で参列。
		7月 スイス・ジュネーブでの第2回万国赤十字条約改正会議に日本全権委員として出席。
		7月 日本国および韓国の両国皇帝に代わり特命全権公使として赤十字改正条約および最終議定書に調印。
		8月 林董外務大臣から条約調印に際して韓国皇帝に代わり調印した件につき批難を受ける。(韓国統監の伊藤博文の意に反することになる。)
		11月 ベルギー王国皇帝陛下よりレオポール勲章グランクロアーが贈与される。
		12月 帰朝命令(10月)を受けて妻子とともに帰国。 (原敬が大阪新報を退社し、第1次西園寺内閣で内務大臣となる。)
48	1907年	5月 外務省を依願退職。
		5月から6月に朝鮮、北中国を旅行。
		7月 スペイン王国皇帝陛下よりシャール・トロワー第一等勲章が贈与される。

49	1908年	<p>1月 岩崎一高(のちの第6代松山市長)、井上要(伊予鉄道社長)らより衆議院議員選挙候補への勧誘を受ける。</p> <p>3月 正四位に叙任される。</p> <p>4月 大阪新報の客員となる。</p> <p>5月 松山に帰る。</p> <p>5月 次女・たへ出生。</p> <p>5月 第十回衆議院議員選挙に愛媛県松山市選挙区にて当選。</p> <p>5月 兵庫県西宮町夙川に転居。</p>
50	1909年	<p>3月 衆議院本会議で「外交文書公表ニ関スル建議案」を提出し理由説明。</p> <p>7月 大阪新報の社長に就任(原敬らの要請を受けての就任)。</p> <p>北浜銀行取締役役に就任。</p>
51	1910年	<p>3月 衆議院本会議に「外交文書及国際交渉事件ノ秘密ニ関スル質問」を提出。</p> <p>3月 銀杯壹箇が授賜される。</p>
52	1911年	<p>5月 朝鮮旅行。</p> <p>中央政界にて予讃鉄道敷設に奔走。</p> <p>8月 大阪新報の新社屋落成。</p>
53	1912年	<p>5月 衆議院議員任期満了。</p> <p>5月 貴族院議員(勅選)に選任。</p> <p>10月より九州・四国出張(11月1日に道後宿)。</p>
54	1913年	<p>5月 貴族院視察団の一員として中国視察に出発し、黎元洪(のちの中華民国大総統)らと会う。</p> <p>6月 帰国。</p> <p>7月 貴族院報告会(中国視察について)に臨む。</p>
55	1914年	<p>4月 北浜銀行取り付け騒ぎが起きる(北浜銀行は大阪新報の取引銀行)。</p> <p>7月 大阪新報乗っ取りの動きがある。</p> <p>8月 原敬と協議し、大阪新報は政友会の機関誌となる。</p> <p>8月大阪新報の後任者と引き継ぎ。</p>
56	1915年	<p>2月より北浜銀行頭取の裁判のため大阪地裁に証人として出廷。</p> <p>4月 旭日重光章が授賜される。</p> <p>11月 大阪新報を退社。</p> <p>12月 白川福儀(元・第2代松山市長)北豫中学校長と会談。</p>
57	1916年	<p>1月 白川福儀・北豫中学校長死去により後任校長問題が生じるが、これに尽力して加藤彰廉(元衆議院議員、元大阪商業高等学校長)と対談し、就任要請受諾に成功する。</p> <p>5月 北京、天津、南京など中国視察旅行。</p> <p>(8月 好古が朝鮮駐劄軍司令官となり、11月に陸軍大将となる。)</p>
58	1917年	<p>2月 ローマ各国議員商事委員会に向けて貴族院側の委員となる。</p> <p>3月 ハルピン-イルクーツク経由でヨーロッパに渡る。</p>

		<p>4月 ロンドンにてイギリス封鎖大臣ロバート・セシル卿と会見。</p> <p>4月 ソルボンヌ大学で講演。</p> <p>5月 ローマ商事委員会に出席。</p> <p>10月 帰国。</p> <p>12月 錦鶏間祇候を仰せ付かる。</p>
59	1918年	<p>3月 貴族院令改正会議に改正案を提出(第一読会で演説)。</p> <p>3月 犬養毅(木堂)議員を訪問。</p> <p>5月 西園寺公望(陶庵)を訪問。</p> <p>5月 中国視察に神戸港より出発。</p> <p>6月 段祺瑞首相を訪問する。</p> <p>6月 帰国。</p> <p>(9月 原敬が内閣総理大臣となる。)</p> <p>11月 牧野伸顕・元外務大臣とともにパリ講和会議について西園寺公望を訪問。翌日、内田康哉・外務大臣を訪問。</p> <p>12月 パリ講和会議随員(囑託)として、牧野伸顕・次席全権とともにパリに向け出国(西園寺公望・首席全権は後に出発)。</p> <p>12月 勲一等瑞寶章が授賜される。</p>
60	1919年	<p>1月 パリに到着し、第一回講和総会に出席。</p> <p>2月 金杯壹箇が授賜される(多年の貴族院議員での勲労不尠より)。</p> <p>4月 次男・六十郎がパリに到着。</p> <p>5月 ベルギー・ブリュッセルにて万国議員商事委員会に出席。</p> <p>5月 内田康哉・外相より、オムスク駐在の臨時特命全権大使内定の電報を受ける。</p> <p>6月 帰国に向け次男・六十郎とともにパリを出発する。</p> <p>7月 ロンドン、コロンボ、香港を経由して神戸に帰国。</p> <p>7月 原敬・首相、内田康哉・外相に報告。</p> <p>8月 特命全権大使に任ぜられ、シベリア出張を仰せ付かる。</p> <p>9月 原敬首相と午餐や晚餐、内田康哉・外相と晚餐。</p> <p>9月 敦賀より出国。</p> <p>10月 ハルピンを経由してオムスクに到着。</p> <p>10月 アレクサンドル・コルチャーク(白軍総司令官、元黒海艦隊司令長官)と会見。</p> <p>11月 オムスクを撤退し、イルクーツクに到着。</p> <p>12月 13日 チタ民団代表と会見。</p> <p>12月 28日 勲一等瑞寶章が授賜される。</p>
61	1920年	<p>1月 10日 チタに到着。</p> <p>1月 11日 グリゴリー・セミーノフ(ザバイカルの統領)と会見。</p> <p>1月 17日 ハルピンに到着。</p> <p>1月 19日・21日 ドミトリー・ホルワット将軍と会見。</p> <p>1月 26日 奉天に到着。</p>

		1月 27日 張作霖と会見。
		1月 30日 帰国。
		1月 31日 議会にて原首相、内田外相と会見。
		2月 3日 閣議報告会。
		2月 4日 ロシア大使と会見。
		8月 六十郎死去(20歳。同日に妻・ヒサが天理教へ入信)。
		9月 金杯一組が授賜される(対独平和条約締結の功)。
		9月 特命全権大使を免じられる。
		9月より11月 北中国を旅行。
		12月 北豫中学協議会に出席。
62	1921年	4月より6月 南中国を旅行。
		9月 原敬首相よりワシントン会議の全権委員の就任要請を受けるが拒絶。
		9月 日本の国際連盟協会役員として国際連盟の思想普及の活動開始。 (11月 原敬が東京駅で暗殺される。)
		11月 原敬葬儀出席、12月 原敬追悼会出席。
63	1922年	この頃より、食事時に異常を覚える(のちに喉頭癌と判明)。
		1月 日本の国際連盟協会愛媛支部が発足し会長となる。
		3月 井上久吉(松山市議会議長)らより松山市長就任を懇請されるが辞退する。
		3月から4月 秋山好古、新田長次郎などからも市長就任を懇望される。
		4月 松山市長の就任を決意し詮衡委員に通知。
		4月から5月 青島、済南旅行。
		5月 第5代松山市長に就任。
		6月 松山城趾を久松家が陸軍省より払い下げを受け同時に松山市に寄附。
		6月より、松山高等商業学校の設立に奔走する。
		8月 新田長次郎が来談。
		8月 軍備撤廃論を演説。
		9月 加藤彰廉(北豫中学校校長・のちの松山高等商業学校初代校長)とともに大阪に新田長次郎を訪ね、設立資金・経営費の援助の約束を受ける。
		9月 松山高等商業学校の設立発起人会のメンバーとなる。
		9月から11月 東京小川町賀古病院に入院。
		11月 摂政宮(皇太子裕仁親王)殿下を奉迎・奉送する。
		12月 台湾旅行。
		12月 松山市議会に簡易住宅建設の議案を提出するも反対多数で廃案となる。
		12月 財団法人松山高等商業学校寄附行為および松山高等商業学校設置認可申請。
64	1923年	1月から2月 広東旅行中に病状悪化し帰松。
		2月 財団法人松山高等商業学校寄附行為および松山高等商業学校設置認可。
		2月 松山市予算市会に出席。

3月 松山高等商業学校の理事となる(初代校長は加藤彰廉・専務理事)。

3月 高浜海岸の新居「浪の家」で病臥となる。

(3月 好古が教育総監を免ぜられ予備役に編入。のちに北豫中学校長になるのも拓川の交渉。)

3月 26 日 松山市長辞表提出後に死去(64 歳)。墓所は松山市の相向寺。

3月 27 日 従三位に叙任され、勲一等旭日大綬章が授賜される。(天皇皇后両陛下より祭祀料御下賜。)

(以降、本学では、加藤拓川を新田長次郎、加藤彰廉とともに学園の「三恩人」とする。)

(2016 年 6 月 1 日 法学部公式 HP 公開用)

【参考文献・資料】

主な参考文献・資料として、『拓川集・日記篇』(昭和 6 年・1931 年)、『拓川集・拾遺篇』(昭和 8 年・1933 年)、古屋壮一・今村暢好「松山大学法学部松大 G P 資料 (一)」『松山大学論集』第 25 卷第 3 号(平成 25 年・2013 年) 28 頁以下、同「松山大学法学部松大 G P 資料 (一)」【資料 2】引用の各『官報』、および拓川翁の令孫である正岡明氏が所蔵する各「辞令」、各「勲章」等を参照。

このほか、拓川會編『拓川集・隨筆篇・上』(昭和 5 年・1930 年)、『拓川集・隨筆篇・下』(昭和 5 年・1930 年)、『拓川集・書簡篇』(昭和 6 年・1931 年)、『拓川集・追憶篇』(昭和 8 年・1933 年)、井上要『北豫中學松山高商樂屋ばなし』(昭和 8 年・1933 年)、松山商科大学『松山商科大学六十年史』(昭和 34 年・1959 年)、畠中淳編著『加藤拓川(松山子規会叢書第 13 集)』(昭和 57 年・1982 年)、島津豊幸『加藤拓川傳-ある外交官市長の生涯』改訂版(平成 9 年・1997 年)、成澤榮壽『伊藤博文を激怒させた硬骨の外交官 加藤拓川』(平成 24 年・2012 年)を参照した。